

生きていた塞翁が馬

南郷 獭

マンションの三階にある部屋の窓からは、立ち木の梢が寒そうに揺らぐのが見えていた。

「この忙しいときになんなのよ」

「いいから、ちょっと見ろよ。これ」

たしかに忙しいさなかだ。

まだ肌寒い季節だというのに、額にはうっすらと汗が滲み出していた。

今や引越し準備の真ただ中。しかも予定より遅れ気味だ。二日後には引越し業者のトラックが来る。

一人息子の加寿夫は高校入学前の春休みを、目いっぱい遊びに当てる連日の留守。自分の持ち物さえ荷造りしようとはしない。

達也が転勤内示をつけたのが五日前。昨日は辞令も受け取って、昨夜はそうそうに送別会も済んだ。

本社設計室での八年間は昨日で幕を引いた。会社は建築機材業界の大手だ。それにしても現金なものだ。

昨夜の達也の送別会は都内の寿司屋の二階。こじんまりとしたものだ。思わぬ珍客の割込みのおまけがついたから、ちょっとは賑わったとはいっもの、同僚の五郎との差はいかにも露骨すぎるではないか。

数日前の磯谷五郎の送別会はTホテルのレストランで、常務や部長も出席して豪華絢爛だったというのに。

そういうことに敏感なのがサラリーマン根性というもの。いささか尾を引く。とって、五郎を責めても始まるまい。

引越し準備の手が止まったのは、送別会の余韻が残った達也の目に、一枚の絵が飛び込んできたからだ。加寿夫が数年前に描いたものだ。

「どこから出てきたのよ。今さぼってる暇なんかないのよ」

女房というものは、いや、女性というものは、こういうときにはいかにも合理的に立ち回れるものなのだ。

(今は感傷に浸ってるときではないわよ)

(わかってる。でも……)

「ここを見るよ」

「5年B組 志賀加寿夫ね。そう四年も経ったんだわ。速いものね」

「この絵だよ。ベガレンそのものじゃないか」

「ベガレンでしょ。あの子、大好きなんだもん」

子供たちが熱中するテレビのアニメマスターはめまぐるしくニューキャラを生むから、中年の親たちにとってはゴジラやウルトラマン止まりで、なんとかレンジャーとか聞いても、そのとき限りで、脳みその一端をかすめ去るだけだ。

子供は脳みその一部に、好きなキャラを刻み込んだまま、やがて声変わりしていく。

「ベガレンの登場はいつころだ？」

「……っと。そんな古くはないわ。去年かな。古くても一昨年ね」

成長した子供たちは、幼い頃のように親と一緒にテレビを見るようなことをしなくなる。

(だのに、加寿夫ときたら……)

「たしか六本木のニューキャラ発表イベントに付き合わされたじゃないか。去年の正月だよ」

今度は妻の由実が捕まってしまった。

「五年生ってことは四年前？ だのに、どうしてベガレンなのよ？」

「……だろ。加寿夫のオリジナルってことだね。あいつ、やっぱりそういう才能があったんだ」

加寿夫は小学生の頃から、インターネットにのめりこんでホームページも出していた

から、この自作キャラを載せたのかもしれない。それが盗用された？

だが、そんなことに関心はなかった。

「そういえばあの頃、家庭訪問で『いつまでもネットに入れ込まないで私立中の受験勉強を』って叱られたわ」

塾には行かない。あまり勉強もしない。でも目指す私立中には上位で入学して三年後、今度は高校も一発合格だった。加寿夫の頭のよさは父親譲りだ、と達也は気分をよくしていた。

ただ、入試というものは知能指数的なものとか知識能力を計る門をくぐることで、経済の活性化や技術の進歩を支える『独創力』への比重は軽んじられている。

（日本の風土は独創力を埋没させてしまっている。このままでは優秀な独創力の持ち主は海外に流れっぱなしになる）

達也の持論だった。嬉しいことに加寿夫の頭のよさは単に知識的なものだけではなくて、独創力の点でも隅に置けたものではないようだ。

《だけど、俺の二の舞だけは踏むなよ》

独創性というものは、保守的な組織環境では、必ずしも快く受け入れられるとは限らない。八年間、精魂を注ぎ込んだ新企画がボツになった達也の赴任先は三重県鈴鹿支店の課長補佐。同僚の磯谷五郎の新しい椅子は岩手支店長だ。数段の格差が生じた。

「お前は上を立てないからだよ」

五郎の忠告が耳に残っている。

「俺は上に逆らってなんかいないぜ。会社のために後手踏まないよう、これだけはという提案をしてるだけなんだ」

「組織つてのは時計の歯車みたいなもんじゃないか。独創性とかいって一つの部品だけが独走したら時計が壊れてしまう」

五郎はうまく立ち回っていた。社内の子社員にも結構人気があった。社内だけじゃない。寿司屋でも飲み屋でもそうなのだ。人の心の裏側を寸時に読み取って、自分を合わせる才能に長けていた。

（特別、二枚目でもないのに）

（俺の方がずっと男らしくて持ててもよさそうなものなのに）
「じつじつのは、浮ついた軽薄な男心なのだろうか？」

大方の男たちの心を断ち割ってみて、邪心（？）のかけらひとつなし、なんてこと

があるのだろうか。

たしかに謹厳実直とかいう言葉はだれもが知っている。そう言われている男もまれにはいる。

だが、(本当にそうなの?)

謹厳な男というものは、女性の目なんか意識しないものなのだろうか。森鷗外なんか結構女性に弱かったと伝記にも記されている。

別に不倫したいとかいっているわけではない。(……できるとなったらどうする?)

(貞淑な女性。これは中世の騎士たちが勝手に作り出した幻想に過ぎないんじゃないか。でなかったら十字軍で遠征する留守の妻たちに、どうして鉄の貞操帯なんか、はかせたりしたんだ。女性たちだって本来は自由に羽ばたくものなのだ)

昨夜、寿司屋の二階に集まったのは二十人あまり。五郎のときの半分だ。

達也はお酒に強くない。一時間もした頃には眠気もさして朦朧としていた。

「おい。がんばれや」

肩を叩かれて我に返ると、「だれなんだ?」 知らない顔だ。

薄い仕切り壁の隣室では軍歌の大合唱。

「おーれとお前は同期の桜あ〜」

「はいッ、お前たちも、いや失礼、みなさんもご一緒に、」 おーなじ会社の庭に咲あ
くく」

この知らない男は隣室からのなだれ込みのようだ。達也はこういうのが嫌でたまらない。見ればかなりの高齢のようで頭髮も薄いのに、まるで元気の塊が人間の皮をかぶったみたいな男だ。

「おじさん。超元気じゃん。何食べてるの」

あの女子社員はいつも達也を無視してるような態度を取るくせに!

「俺たちはな。草の根、ほじくって生き延びた仲間たちなんだ。戦後ふにゃふにゃ族のお前たちとは違うんだ。仲間はたくさん死んでいった。病院のベッドの上でじゃない。血まみれ、泥まみれだぞ。だから俺たちや仲間の分まで生きるんだ。それが供養ちゅうもんだ。あんたたちも命を大事にしろよ」

うるさい親爺が越境してきたものだ。

「おじさんたちは軍国主義者なの?」

違う女子社員が訊いた。

「とんでもない。あんたら、二度とあんな戦争をしたら駄目だぞ」

「なら、どうして軍歌なの？」

「青春の歌なんだ。ほかに何があるっていうんだ。だからパチンコ屋や右翼の宣伝力
ーがガナリたくるのは我慢ならん」

そのとき。

「おーい。クマさんよ。皆さんにご迷惑掛けちゃいかんよ。すみませんね、みなさん。
根はいい奴なんですよ」

一見温厚そうな紳士が仕切り壁を抜けてやってきたのだ。でもクマさんは、おいそ
れとは引き下がらない。呂律もおかしくなっている。

「彼がいたいのは……。国という単位で考えるから戦争が起こるんです。昔、長州
や薩摩があつたから国内戦争があつた。宇宙人が攻めてきてからじゃ遅い。今、戦争
のない地球を作る。そういう発想が必要だ、と。これはクマさんだけじゃない。死線
を越えてきた我々みんながそう思っていますよ」

あとはよく覚えていない。達也は珍しくよくしゃべったような気がするが、気がつ
いたときは宴席はお開きになり、隣の部屋も静まりかえっていた。

(どこに行ったらいいんだ?)

せつかくの命の洗濯日がやってきたのだ。荷造りは昨夜遅く仕上がったから、今日
一日は悠々自適の気ままな日だ。

思えばこの八年間、たまの休日には家庭サービスに明け暮れていた。休日出勤が多
いから罪滅ぼしのつもりだった。

自由に一人を出掛けていいよ。そういう場面がいきなりやってくると、働き蜂には
何をしてもいいのやら、迷いが先に立ってしまう。

(さあ、時間もお金も気ままにお使いなさいよ)

それは心の奥底に沈んでいた日頃の渴望だったはずなのに、いざ実現となると、迷
いに足をすくわれてしまう。

由美も加寿夫も朝からいそいそと出掛けてしまった。

「お昼も夕食もお好きなようにどうぞ」

どうやら晩まで帰らないつもりらしい。熱海の親友のところまで足を伸ばしたのか
もしれない。

考えてばかりいても始まらない。あてどもなく足は渋谷の繁華街に向かった。

ネオンが灯らないこの街は、化粧を落とした役者の素顔のように、なんのことはない。ただの人口密集地にすぎなかった。本屋があり、薬局があり、理髪店がある普通の生活感に溢れた街だ。

向かうともなく足が勝手に道玄坂に向かっていた。裏道に入ると百軒店の小道に続いている。

足がナビゲートするということは、そこに『久美の店』があったからなのだろう。

五郎に引つ張られてよく来たこじんまりとした店だ。

五郎の狙いは、その若くて美人のママ、久美だったことに間違いはない。風に揺れる白い花のような、触れたら散り落ちてしまいそうな白い面影は男心を揺さぶらすにはいられない。放っておけない保護本能が目覚めてしまうのだ。

だが、平日の午前に店が開いているはずはない。そう承知していても足はおのずと店に向かってしまう。

と……、

(あら、達也さんじゃないの。どうしたの？ こんな時間に)

夜とは別人のエプロン姿で手筈を持った久美は、やはり昼でも清楚な雰囲気をかもし出していた。

(こっぴう姿の方が好きなんだよ)

……

(あなたッ、白昼夢なんか見て！)

達也の頭の中の独創劇である。目の前には再び現実の風景が展開する。

「おやッ、あの爺さんは？」 見たことのある顔のようだ。誰だ？

「御用ですかいな」

(おッ、あの時の闖入者、同期の桜じゃないか)

達也の釘付けの視線に、いぶかしそつに彼は顔を上げた。

「あのぉ、おとといの晩、新橋のお寿司屋さんでお会いしましたよね」

「ほうほう、あなたでしたか。よかった」

「？」

「あとで隊長から、えらい怒られました。失礼しました。それと隊長が無茶言うんで困ってました。あなたへの連絡先を調べろ、なんていうんです」

「どうしてなんでしようね」

「隊長はあなたのご意見にえらい共鳴されてましてね」

「？」

「湯川博士とか、ゼネラルアトミックの大河博士とか、わしには難しくてわからなかったけど」

「私の所属だったら、あのお寿司屋さんに聞いたらわかるでしょう」

「そう言わんで名刺一枚くださいな」

達也が知りたいのは隊長さんなんかではない。まるで、その心が透けてみえたかのように、名刺をせしめた爺さんは、

「あれは自慢の孫娘なのですが、運のないやつでしてね。好きで結婚した相手は一年もしないうちに事故で死なれるし、やっと再婚したかと思ったら今度は、あの野郎め。

金攫ってドロンですよ。かわいそうな子ですわ」

「何か寂しそうに見えました。放っておけない感じで」

「久美は今、出掛けています。なんでも常連のお客さんがご栄転とかで、お祝いの花を買に行ってます」

達也の頭には少々血がのぼっていた。五郎の得意げな顔がちらついたからだ。五郎は所きらわず、単身赴任の東京独身を吹聴している。

「中でお茶でも……」

「行くところがありますので」

もちろん当てはない。しばらく渋谷、原宿をさすらってみたものの、荷造りの疲れもあって、

() ぐる寝が一番の警沢と見つけたり！)

そつそつに帰宅して、荷物の隙間でのぐる寝を決め込むことになってしまった。

昼下がり。チャイムが鳴った。

「由美かい。早いだね」

「うめんくだね」

「えッ」

立っていたのはアプリコットの大束の花を抱えた久美だった。

「よく、ここがわかったね」

それには答えず、白いうなじを心もち傾けて達也を見つめた。その視線は鋭い矢尻になつて達也の胸にぐざりと突き刺さった。

「五郎さんはうわべだけのお人。調子あわせがお上手なだけ。でもお金払いがいいから大事なお客さんなのよ」

（私が好きなのはあなたよ）

そうは言わなかった。聞こえたのは、

「奥様つてお幸せな方ね。大丈夫よ。私は取ったりはしませんから」

これは白昼夢ではなかった。

由美も加寿夫もまだ帰ってこない。

（出掛けるのはめんどくさいな。夕食は寿司を取ろう）

昨夜も寿司だったことは忘れていた。

電話のベルだ。

「な、なんですって！ そんなことって」

会社の人事はいったい何を考えているのだろう。

「運送屋さんには会社からキャンセル料を払いますから、社名と電話番号を教えてください。それから荷物は解かないように」

「お話がさっぱり飲み込めませんが」

「詳しい説明と新しい辞令をお渡ししますから明日、出社してください。息子さんの県人会学生寮の方はあなたから取り消しをお願いします」

どういふことなのだ。どうやら鈴鹿行きはないようだ。

帰ってきた由美は大憤慨である。

「さんざん鈴鹿の話をしちゃったわよ。ひ子さんはあの辺に詳しいの。湯の山温泉とか尾鷲の竹林なんか絶対のご推奨なのよ。だから落ち着いたらぜひおいでくださいって約束までしちゃったわよ」

人事としてはいったん発令をした辞令を撤回するわけにはいかない。

「形だけいったん鈴鹿に行つて着任届を出してください。この辞令の日付は明後日にしてありますから、明日中に鈴鹿の着任届を先方に出してもらつたら、後はこちらで処理します。本来はこの新辞令は明後日お渡しするのがスジですが、会長からの肝煎りですので」

「会長さんが？ どう関わつてるといふのですか」

「人事としても、そのところが。口止めされておりました」

会社に会長の存在があることは知っている。が、達也にしても五郎たちにしても会長の顔など社史でも見ないことにはわからないのだ。会社のパンフレットの顔写真は社長だけである。

「今晚はご家族とご一緒に、こちらにお泊りください」

用意周到。ホテルのチケットが渡された。

(由美があこがれていた一流ホテルではないか。これで、「ご機嫌上々だな」

「辞令の内容をご確認願いますよ」

「……はあ」

八王子研究所新機種開発部技術部長

業界でも名だたる著名の研究所。あこがれの夢の研究所だ。会長の英断で設立されて以来、会長室さえ本社ではなく、ここにあるという。

隠れて腕を(まさか類というわけにはいかない)つねってみた。

痛かった。

形式的な着任届にサインするためにだけ鈴鹿往復とは酔狂な話だ。

だが、新幹線と近鉄特急の乗り継ぎの三時間は、この意外な展開の裏側を推理するのには、最適の時間だった。ほかにすることといってない。さらに人間の思考回路といつもの微妙なところで、三時間といえども旅にはちがいない。旅の心は物事を透

(もしや?)

あの隊長とは実は、うちの会社の会長ではなかったのか?

あの爺さんに連絡先を調べるといった。達也は酔いに任せて持論をしゃべっていたという。例の独創力海外流出を防止しろ、という持論が出たのだらう。

昔の陸軍将校が今の会社の会長だったとしても不自然はない。

そつえば八王子研究所は本社機構とは完全に独立していて、純益の一分を八王子に投資している、とは承知していた。本社は現業重視で開発も今日明日を勝ち抜くための実利開発である。だから未来開発的な達也の努力は認められなかった。達也の開発は会社の長期的発展のためにこそ価値がある。

ただどうしても合点が行かないのは、隊長さんと話をしたのは、たった三日前のことだ。(そんなに電光のように事が運ぶとは考えられない)

鈴鹿とんぼ返りは、なんの答もなく、形式を踏むセレモニーのように終わってしまった。昼食に出された松阪牛がとろけるようにおいしかった。名古屋のホームのきめんも旨かった。

なんのことはない。食べ物の印象ばかりで、ことの成り行きは藪の中。わからずじまいだった。

「もしや、万一? やっぱり会長さんとは?」

八王子研究所の総務課では、またもやびっくり箱が待っていた。

「荷物の送り先をお知らせするのが遅れて申し訳ありませんでした。井の頭四丁目のこの家です」

「マンションではなくて、一戸建ての借り上げですか」

「社宅ではありません」

「?」

「ご面倒ですが、あなたのお名前で登記してください。研究所側で登記して差し上げたいのですが、あなたの実印が必要ですから、この司法書士とお打合せなさってください」

「いったいどういうことなんでしょう。飲み込めないのですが」

「会長から説明されると思いますが、あなたの企画を不発にした本社現業部門には、

短期損益計算上の制約がありますから実行は困難なのです。」

「それはわかります。でも、一等地の一戸建てを私名義にするというのは、会社の資産分散とかの税務対策ですか」

「あなたの特許出願件数を、ご自身はご存知ですか」

「勘定したことないですね。八年間で四十件ぐらいかな」

「とんでもありません。七十七件で、そのうち半数以上が海外からの特許使用料その他で、会社が得た純益は百二十億円に及んでいます。一方、会社規定による本人特許料として八年間にあなたに支払われた総額は六百万円に過ぎません」

さらに驚いたことに、『技術部長にはセクレタリがつく』から、会長室で彼女も待っている、というのだ。

(もう一度、腕をつねってみようかな?)

「志賀達也と申します。思いもよらず、こちらでお世話になるようになり無上の光栄に存じます」

やっぱり違った。あの隊長ではなかった。歳のころは似たようなものだ。

「うわっはっはっは」

「はあ?」

「わしはな。ずっと独創的な人材を探しまくったのだ。八年前からの君の開発データは全部収集してある。本社が君を鈴鹿に飛ばしたのを、ついつい見逃してしまつて悪かったな。君が送別会で会つた隊長さんというのはわしの陸士時代の旧友だね。えらい怒られてしまつたわ」

「ついでに君を驚かせてやろう。おーい。出ておいでよ
衝立の陰に隠れていやがった。」

「秘書の国武でございます。よろしくお願いいたします」

「……!」 出てきたのは、……久美!

「志賀…達…也…で…!」

「うわっはっはっは。初対面かな。戦友のお孫さんだよ」

どうなってるんだ。だが、白昼夢ではない。

久美が結婚前はこの会社の支店に勤めていたことなど、ついで聞いたことはなかつ

「塞翁が馬って知っとるかね」

「はい。禍福はあざなえる縄のごとし、というのと同義のような」

「まあ、そういつてもいいかな。でも、お話のあらすじを言えるかい？ 国武君じゃ無理かな」

「いえ。昔、中国の塞（とりで）のそばに住んでいたサイオウというお爺さんの馬が逃げるという不幸から始まって」

……ところが逃げた馬がお嫁さんのメス馬を連れて帰ってきたので塞翁は幸せに…

…

塞翁の一人息子がその馬に蹴られて不具の身。ところが戦争が始まって、まわりの若者は兵役に取られて死んでしまふ。不具を背負った息子は生き残る。

「こんなお話でしょう。子供の頃の絵本での知識でしかありませんけど」

「いやー。十分だよ。いい絵本を読んだものだね。ところで志賀君、今度君に禍が襲うとしたらどうするね」

「常にリスクマネージメントを忘れずに、危険を予知しますが、ここはという時には虎穴にも入ります。万一転んだら、何かお土産を掴んで再起したいです。転んでもただじゃ起きません。七転び八起きです」

「後日談の一」

国武久美の美しさには、さらに磨きがかかった。しかもそれは、あの壊れそうな美しさではなく、むしろ活き活きとした弾むような眩しさに変わっていた。

さらに驚いたことに、經理の管理能力は思いのほか、しっかりしたものだ。五郎に花束を贈らず達也に贈ったのは、好きとか嫌いとかいうことではなく、人間の誠実度、将来性、要するに株式投資としての値踏みがそうさせた、と思わせる節すらあった。

「後日談の二」

磯谷五郎は岩手支店長の椅子を半月で追われて退職した。本社經理の女子社員の使い込みの糸をたぐった先にいたのが五郎だったからである。

「後日談の三」

加寿夫は井の頭の豪華な家の中に、高校のロボ研専用室を作り、由美はこの家でなんの動機からか、童話を書き始めて瞬く間に有名公募の大賞を連続受賞し、今や新進童話作家として雑誌社に追われる日々を送っている。

「心すべし」

禍福はあざなえる縄のごとし。塞翁が馬を忘れるべからず。

り

《おわ